

佐土原キリスト教会 2021年7月25日 礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 20章 24～31節

説教題：私の主、私の神

南インドに「聖トマス教会」という教会があります。その教会はトマスの伝道によって建てられたと言われています。1つの伝説があります。トマスは、紀元52年頃、王の宮殿を建てる大工としてインドに行き、宮殿建設の責任者になりました。ところが彼は、宮殿の建設費として支給されたお金を全部貧しい人々に施していました。「どうも様子がおかしい」と思った王は、宮殿を見に行くことにしました。王がトマスに「いつ私の宮殿を見に行けるのか」と尋ねると、トマスは答えました。「今は見る事が出来ません。王がこの世を去られる時に見ることが出来ます」。王はカンカンに怒りましたが、そんな時、王の弟が「天国に建てられている王の宮殿」の夢を見るのです。それもあって、やがて王はトマスに心酔するようになり、インドにキリスト教がもたらされるようになった、というのです。これは伝説ですが、トマスがインドで宣教したのは事実だと思います。

トマスは、今日の聖書箇所の出来事のために「疑り深いトマス」という不名誉な名を歴史に残すこととなります。しかし—(伝説はともかくとして)—やがて彼は、生涯をイエス様のために捧げるようになったのです。何がその変化をもたらしたのか。この箇所はそのことを考えさせてくれますが、同時に「私達の信仰の歩みに何が大切か」、そのようなことも教えてくれます。3つのことを申し上げます。

1：求める

「ヨハネ 11章」にイエス様が死んだラザロをよみがえらせる記事があります。ラザロのいるベタニヤは、イエス様を狙う指導者のいるエルサレムと目と鼻の先です。そこへ行くことは、殺されに行くようなものでした。弟子達も止めます。しかしトマスだけは「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」(11:14)と言えたのです。「疑り深いトマス」と言われる彼ですが、他の弟子達以上にイエス様に打ち込んでいたからこそ、主の十字架が、立ち直れない衝撃だったのではないのでしょうか。イエス様が弟子達に現われなされた時、彼はそこにいませんでした。1人で沈んでいたのかも知れません。そんな状況で弟子達が「イエス様に出会った」と言うのが、調子が良すぎるように思えたのです。その気持ちをごまかして、皆に調子を合わせることは出来なかったのです。だから「私は…指を釘のところに差し入れて…みなければ信じない」と言ったのだと思います。

10人が「イエス様を見た」と言っている中で、1人「俺は信じない」と言い続けるのは辛いことだったでしょう。しかし彼は「お前達とは一緒にやって行けない」と言って弟子団から身を引くことはしなかったのです。弟子団から離れたら、ますますイエス様から離れてしまうように思われたからでしょう。つまり彼は、もしイエスの復活が本当なら、それを信じたかったのです。その意味で真剣に求めていたのです。そして次の日曜日、イエス様が現れて下さったのです。トマスの真剣な求めがあったからこそ、イエス様が彼の前に現れて下さった時の、彼の劇的な変化があったのだと思います。世界で初めてイエス様を「神」と、天地万物を造られた「神」と、呼ぶのです。彼のその信仰告白が、後の教会の信仰告白になるのです。私はトマスの真剣さに教えられる気がするのです。

かつてイエス様は言われました。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたき者には開かれます」(マタイ 6:7～8)。この言葉は、正確には「求め続けなさい…捜し続けなさい…たたき続けなさい」という言葉です。私達の信仰生活—(信仰の生涯)—は、どこまでも巡礼です。巡礼者は、神に近づき、神を経験することを求めて歩み続けるのです。ある神学者は言っています。「神の御業を拝するためには、神を待ち望むことが必要です」(小林和夫)。「私達は、どれくらい真剣に神の御業を待ち望んでいるか」、トマスの一途さにチャレンジされる気がします。神の御業を拝することが出来るように、真剣に求め続けたいと思うのです。

少し話が変わりますが、24 節に「デドモと呼ばれるトマス」(24)という言葉があります。「デドモ」というのは「双子」という意味です。トマスという名前の人が沢山いたから、区別するためにそう呼ばれたのでしょう。そのトマスの兄弟は、聖書には登場しません。どこへ行ったのか。ある神学者が示唆に富んだことを言っています。「もう 1 人を探さなくても良い、それは私達自身だ」。それは「疑り深いトマス」という意味での双子です。私達も、何か困難があると、求めるより、疑い深くなります。主は生きておられ、働いて下さっている、ということに疑うのです。そういう時こそ、主の業を求めるべきなのです。私達は「疑り深いトマス」の双子かも知れません。しかし、真剣に求めるトマス、熱心にイエス様を慕い、神を求めるトマスの双子でもありたいと願います。

2：神の恵みに帰る

復活のイエス様が弟子達の前に姿を現されるのは、聖書の記載によれば、復活された日曜日が 5 回、そしてその後の 40 日間でさらに 5 回です。書かれていない顕現も沢山あったと思いますが、聖書の記載によれば、この箇所の顕現は 6 回目の顕現ということになります。貴重な 10 回の顕現の中の 1 回。誰のための顕現だったのでしょうか。

25 節に「ほかの弟子たちが彼に『私たちは主を見た』と言った」(25)とあります。これは「言い続けた」という言葉です。10 人はトマスに言い続けたのです。「トマス。イエス様が現れたよ。すごかったよ」。しかし 10 人がかりで説得されても、彼はどうしても信じることが出来なかったのです。「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」(25)、この言葉は「信じたいけど信じられない」という何とも言えない悔しさの裏返しという言葉だと思います。そのトマスの心を砕いたのは何だったか。それはイエス御自身の顕現でした。トマスの前に現れたイエス様は、トマスが言った通りのことをトマスに語りかけられます。「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい」(27)。イエス様は、信じたいけれど信じられないトマスの苦悩を知っておられ、その心を汲み取っておられたのです。そして「あなたが信じることが出来るのなら、私のこの傷に手が差し入れられる痛みなどは何でもないんだよ」と言われたのです。この顕現は、主を求めていたトマスの許へ、イエス様の方から足を運んで下さった出来事だったのです。「あなたの指をここに…差し入れなさい」。トマスはこの瞬間、この傷が誰のためであったのかということも悟るのです。そして「わが主。わが神」と素晴らしい信仰告白をするのです。しかしその告白は、イエス様の恵みと憐れみによって成立した告白だったのです。そしてこのことは、私達の信仰についても言えることだと思います。私達の信仰も、神の恵みによって始まり、神の恵みによって支えられて行くのです。

1 人の姉妹の証しを読みました。彼女の弟さんは、生まれながら難病を患っていました。家族の生活は、いつも弟さんを中心とした生活でした。彼女も親にも甘えられない。時には弟さんに対する妬み、両親への不満も感じながら育つのです。世間の差別に苦しむこともありました。しかし、やがて弟さんが教会の作業所で働き始めると、弟さんはイエス様を信じ、彼女を教会に誘うようになります。彼女は、義理で礼拝に出ていましたが、説教はほとんど聞いていませんでした。しかし、時々耳に入って来る言葉に、涙が出て来るのです。後で、それはイエス様が心に触れて下さっていたのだと分かりましたが、その時は、救いの必要は分かりませんでした。でもお母さんが亡くなり、教会で葬儀があり、牧師が「お母さんは、この女性ならこの子をまかせても大丈夫だと、多くの女性の中から選ばれた、強くて素晴らしいお母さんです」と説教した時、彼女は驚きました。「母親は犠牲者だ」と思っていたのに、母親を誇りに思えたのです。同時に弟さんと共に生きる自分に対する見方も「弟の犠牲者ではないのかも知れない」と変わり始めます。やがて彼女は介護の仕事に就きますが、愛を持って人と関わることの難しさに苦しむのです。そんな時に、教会で聞いた「放蕩息子」の話—(ボロボロになって帰って来た息子を、走り寄って迎える父親の話)—が心に甦るのです。ご本人の言葉です。「走

り寄って抱きしめて下さった神様の御手の感覚が体中に感じられました。私は子供のように泣きじゃくり、神様の胸に飛び込んで行きました」。そして洗礼を受けるのです。5年後、弟さんは42歳で召天されます。悲しみはありましたが、「その年齢まで生きられたことの奇跡、いのちをかけて家族を導いてくれことへの感謝」、それがイエス様への感謝となって溢れるのです。

私はこの方の証しを読んで、改めて「信仰はイエス様によって始められ、イエス様によって守られて行くのだ」ということを思いました。私達が何か素晴らしいものを持っているから信仰生活を始めることが出来たのではありません。何か私達の心に入って来たのです。そして何か私達の信仰を守り続けているのです。もしサタンが私の信仰を潰そうと思えば、私の信仰などイチコロです。それなのに、今でも信仰者として歩ませて頂いている、「守られているのだな」と思います。皆さんはいかがでしょう。だから信仰に必要なのは、いつも神に—(神の恵みに)—立ち返ることです。私達は、背中を向けておられる神に必死になってぶら下がっているわけではありません。神の恵みが私達を取り囲んでいるのです。確かに「神様は私のことを気に掛けて下さっているのか」と言いたい時もあります。でもイエス様はトマスのうめきを聞いて、知っておられたのです。イエス様は、私達のうめき、祈りを知っておられるのです。「私は主の恵みの御手の中にいる」、いつもそこに立ち返る、それが信仰の歩みに大切だと思います。

3: 交わりに加わる

イエス様が最初に弟子達の前に現れた時、トマスがイエス様に会えなかったのは、トマスが弟子達の交わり—(教会)—から離れていたからです。そして、トマスがここでイエス様にお会い出来た時、彼は弟子達の交わり—(教会)—の中にいたのです。これは偶然ではないと思います。「エペソ人への手紙1章23節」に「教会はキリストの身体であり、いっさいのものをいっさいのものによって満ちた方の満ちておられるところです」(エペソ1:23)とあります。言い換えると「教会はキリストの身体であり、イエス様の満ちておられるところです」となります。1対1でイエス様と交わることは大切です。イエス様も「奥まった部屋に入(って)…隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい」(マタイ6:6)と言われました。しかし教会は、キリストが満ちておられる所なので、個人的な交わりでは経験出来ないようなイエス様との出会いを経験出来る場所なのです。

イエス様は「見ずに信じる者は幸いです」(29)と言われました。この「幸い」という言葉は、「心の貧しい者は幸いです」(マタイ5:3)と言われた、あの「幸いです」と同じ言葉です。「祝福だ!」と言って下さっているのです。「見ずに信じる者」とは誰でしょうか。それは、第2世代以降のクリスチャンであり、そして私達です。私達はイエス様の言われた「見ずに信じる者—(見ないで信じる事が出来た幸いな者)」なのです。でも1人で信じる事が出来たのではありません。何らかの形で、どこかの教会が私達にイエス様を伝えてくれたのです。イエス様を肉の目で見ることが出来ない私達のために、「見ずに信じる」事が出来るように、神は教会を造り、イエス様と出会う場所として下さったのです。そしてそれは、最初の出会いだけではなく、私達は、信じる者の交わりの中、教会の交わりの中で、イエス様と出会い続けるのです。なぜなら教会こそがキリストの身体であり、その頭としてイエス様が臨在しておられる所だからです。私達は信仰の歩みのために教会の交わりを必要としているのです。以前、カナダ・メソナイト総会で議長がスピーチしました。「教会は、色々なことがあるけれど、素晴らしい景色を見ることが出来る場所だ」。

しかし、トマスは「交わりに加わること」で終わらないのです。初めに「聖トマス教会」がトマスの伝道による、という話をしました。伝説によれば、彼は直接イエス様の指示によってインドに送られるのです。つまり、交わりの中でイエス様に会っただけではなく、主の働きの中でイエス様に会い続けるようにされたのです。「どんな人に聖書が良く分かるか」という議論があります。そのうちの1つは「証をしようとする人」です。「証」に踏み出して行く中で、私達は主に近づくということです。

ある時、韓国人の先生と話をしました。先生は言いました。「韓国のクリスチャン人口は確かに多い。しかし腐敗も始まっている。伝道に力を入れなければ、腐敗は進んで行く。韓国の教会が伝道して行くことで一番助かっているのは、韓国の教会なのです」。つまり「『証』をして行く中で、信仰が、教会が、守られる」と言って良いのではないのでしょうか。

こんな話があります。(先週ご紹介した話のフルバージョンです)。「イエスが天に帰られた後、天使の長ガブリエルがイエス様に言いました。『主よ、人間達のためにひどく苦しまれたことでしょうか。でも、人間達は、あなたが自分達をどれほど愛され、自分達のために何をされたか、それがよく分かったでしょう』。イエスは言われました。『いや、まだ分かっていない。今はパレスチナにいるほんの僅かな人々だけが分かっているだけだ』。ガブリエルは言いました。『では、全ての人にそれを分からせるために一体あなたは何をして来られましたか』。イエスは言われました。『私はペテロやヤコブやヨハネやその他の数人の人々に、私のことを伝えることを生涯の仕事するように依頼した。他の人々はさらに別の人々に伝え、また別の人々は、最も遠くの地に居る人々までが私のことを知るようになるまで伝えて行くだろう』。ガブリエルは非常に疑わしそうな様子でした。彼は弟子たちが十字架の時に逃げ去ったことを良く知っていました。そこで彼は言いました。『そうですか。しかし、ペテロやヤコブやヨハネが疲れて来たらどうするのですか。彼らの後に従う人々が、忘れてしまったらどうするのですか。(21世紀の人々があなたのことを他の人々に伝えなかったらどうするのですか)。あなたは何か外の計画でも立てておられるのですか』。イエスは答えられました。『私には外の計画はありません。私は彼らを当てにしています』」。

私達はイエス様に会い続けるために教会を必要としています。しかし私達だけではなく、誰かがイエス様に会うために教会を必要としているのです。そしてイエス御自身が、誰かと会うために教会を必要としておられるのです。イエス様は、私達の交わりをも当てに下さっています。私達も、1人でも多くの方にイエス様に会って頂けるような教会でありたいと願います。その中で私達の信仰も祝福されて行くのです。